

氏名(本籍)	なかむらまさとし 中村正利(長野県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第2198号
学位授与年月日	平成11年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	意味と指示の懐疑論
主査	筑波大学教授 文学博士 藤田晋吾
副査	筑波大学教授 博士(文学) 谷川多佳子
副査	筑波大学助教授 竹村喜一郎
副査	筑波大学大学院助教授 信原幸弘

## 論文の内容の要旨

本論文は、今世紀アメリカ哲学を代表する W.V.クワインの「翻訳の不確定性」テーゼを、意味と指示に関する懐疑論として捉え、このテーゼに対する反論を試みた労作である。全3章から構成され、各章の概要は次のとおりである。

第1章「意味の懐疑論」。翻訳の不確定性テーゼは次の三つの主張を含む。(1) 言語的傾性全体と両立可能な翻訳マニュアルは、原理上、複数個存在することができ、この複数個のマニュアルのいずれが正しいかを決定すべき「世界の事実」は、心の内にも外にも存在しない。(2) 翻訳されるべきある言語の文  $S^*$  の、二通りのマニュアル A, B に従った翻訳文  $S_A, S_B$  は、言語的傾性全体と両立可能でありながら、真理関数的等値関係  $S_A \equiv S_B$  にならないような場合も生じうる。(3) もしも翻訳の不確定性テーゼが、クワインの言うように、われわれ自身の言語にも及ぶとすれば、「われわれは他人が何を信じているかを知りえない」だけでなく、「われわれはわれわれ自身が何を信じているかをさえ知りえない」ことになる。この三つの主張のうち、(1)(2) はクワイン自身の主張であるのに対し、(3) はこのテーゼの検討に一冊の本を費やした R.カークの推論である。そこで著者は(3)の主張をクワインに帰属させることを避け、われわれ自身の言語に関しては、(1)(2) ごとき「文翻訳の不確定性」ではなく、「名辞(単称名辞, 一般名辞) に対して異なった指示対象を割り当てることが可能という意味で、複数個の相異なる翻訳マニュアルが存在する」ことを主張する「指示の不可測性」のみが問題になりうる、と見なす。著者が「翻訳の不確定性」を「指示の不可測性」に切り詰め、第3章において「われわれの言語に及ぼされた指示の不可測性」のみを批判するのは、この理由によると思われる。

第1章の後半は、クワインが不確定性テーゼを提唱するに至った経緯と目的を検討することに当てられている。著者によれば、このテーゼはクワインがカルナップの「分析性」概念を批判する文脈の中に位置づけられるべきである。分析的真理を擁護するカルナップの議論は、「分析性」が人工言語の中でのみ解明されるとするものであるが、クワインは被解明項たる「自然言語における分析性」の存在自体を否認した。そこでカルナップは、さらに一歩進めて、まったく道の言語の翻訳を企てるという場面を想定し、言語学者は当の言語の諸表現の外延のみならず、内包をも確定できる(確定する手続きが存在する)と論じた。これがクワインの「根底的翻訳」の場面設定となり、彼はカルナップとは正反対の、翻訳は確定しないという結論に至ったのだ、と判断する。著者がカルナップとクワインの論争を辿り、翻訳の不確定性テーゼの目的だと見定めたものは、「分析性」概念を支える「意

味の同一性（同義性）」が存在しないことの、したがって、「意味」なる存在者を惜定する根拠が存在しないことの、論証である。

第2章「意味の懐疑論から指示の懐疑論へ」。翻訳の不確定性テーゼから指示の不可測性テーゼへの橋渡しであり、その内容は、上に述べた第1章の要約に含まれている。

第3章「指示の懐疑論」。本章は、指示の不可測性テーゼに対する批判を著者独自の視点から展開しており、本論文をきわめて刺激的なものにしている。クワインによれば、指示は二重に相対的である。第一に、指示は背景言語に相対的であり、第二に、翻訳マニュアルに相対的である。第一の相対性について、クワインは位置を述べることと指示を述べることとの間のアナロジーを援用しているが、著者によれば、このアナロジーは成り立たない。他方、第二の相対性について、著者は、指示が翻訳マニュアルに相対的だとするこのテーゼが、レーヴェンハイム＝スコレムの定理からでも、パトナムのPermutation Theoremからでも導くことができることを示す。その上で、指示の不可測性がわれわれ自身の言葉にまで及ぶとするクワインのテーゼの批判に向かうのである。その戦略は、「われわれは水槽の中で培養されている脳と同じだ」とする形而上学的実在論の見地が自己論駁であることを証明する論法を、指示の不可測性テーゼに応用することにある。こうしてわれわれ自身の言語に及ぼされた指示の不可測性が、「われわれは水槽の中の脳と同じ」という見地を論駁する超越論的論証—「われわれが水槽の中の脳である」との仮定から「われわれは水槽の中の脳ではありえない」との結論を導く論証—と全く並行的な議論によって、自己論駁的であることが証明される。ここから著者は、われわれ自身の言語に及ぼされた指示の不可測性テーゼが形而上学的実在論に与するものと見、このテーゼはクワイン本来の内在主義の立場と相容れないものであるから、内在主義の立場をとるかぎりこれを受け入れることはできない、と結論する。

## 審査の結果の要旨

本論文は、クワインが提起し、クワイン自身が明確に定式化することに成功しなかった（それゆえ、最も頻繁に議論されてきた）「翻訳の不確定性」テーゼを「指示の不可測性」テーゼと絞り込み、さらに、指示の不可測性を「われわれ自身の言語」にまで及ぼすことによって、クワインの内在主義哲学における不整合性を突こうと試みた労作である。終始一貫して自分の言葉で平明に論じ、明確な結論にまで導く論述は、著者の実直な研究態度を示している。

本論文がこの問題の解明に寄与したと見なしうるのは、次の諸点である。①「翻訳の不確定性」テーゼの目的が「意味という存在者の拒否」に他ならないことの論拠を明らかにしたこと。②このテーゼがクワインとカルナップの「分析的真理」の存在をめぐる論争に由来し、その文脈の中ではじめて正当に理解しうることを、彼らの論文、往復書簡等によって確認したこと。③背景言語に対する相対性が成立しないことを論証し、その相対性を「指示の二重の相対性」から取り除くことによって指示の相対性を簡潔にしたこと。④パトナムの「水槽の中の脳」の議論を指示の不可測性テーゼに応用し、そのテーゼに対する注目すべき否定的結論を引き出したこと。とくに、③④を論じた第3章は、著者の着眼のよさと達意の論述によって、すぐれた哲学論文の特徴を備えている。

しかし他方、本論文が持ついくつかの問題点も看過できない。本論文全体を通して、翻訳の不確定性テーゼを検討する著者の視点はつねに「われわれ自身の言語」に固定されている。この方針は、問題の核心を決するという点で有効であるが、クワインの他の諸テーゼを切り捨てるおそれがある。たとえば、もし「翻訳」の不確定性テーゼを「指示」の不可測性テーゼとして批判することが許されるならば、「意味」の存在-非存在の問題が置き去りにされる。その結果、翻訳の不確定性テーゼが「分析的真理」批判の文脈で理解されるべきだと第1章の主張にもかかわらず、第3章は形而上学的実在論の批判で終わっている。この論点の食い違いは再検討を要するであろう。また、第3章において「われわれは水槽の中の脳と同じ」とする形而上学的実在論の見解が自己論駁的だと論ずるとき、著者の論拠はパトナムのそれと同じではない。パトナムの主眼は、水槽語での「水槽」は水槽を

指示しないという点にではなく、指示の可能性条件を満たさないという点にある。著者は自説を別の角度から擁護しなければならないであろう。

本論文は、以上のような不満を残すとはいえ、「翻訳の不確定性」テーゼを批判的に検討したわが国最初の本格的な研究である。その結論部たる第3章は、すでに学会誌で公表され、然るべき高い評価を得た二編の論文を骨子にしており、その他の諸章も手堅い研究の成果として評価できる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。